

---

# 人生の楽しい終わらせ方

鳴瀬杏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人生の楽しい終わらせ方

### 【NZコード】

NZ693Y

### 【作者名】

鳴瀬杳

### 【あらすじ】

生きてるって感じたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし

「カナタはさあ……クリオネに似てる」「知ってる？ クリオネってさ、……死んだら溶けてなくなるんだよ」

死にたがりの少女、サエキ。  
生きたくない少年、カナタ。

死に方を探していたはずなのに、いつの間にか、二人で生きたくなっていた。

海の見える街で、静かに流れる傷を舐め合う恋の話。

野いちごにて連載中の作品を、書き直して投稿しています。

# いち

田の前で、人が死のうとしていた。

助ける気になつたのは、彼女の田に空が映つていたからだ。

空を見上げたら、真っ青で綺麗だつた。

だからちよつと、死んでみよつと思つた。

「…………わいあく」

かーんかーん、と踏み切りの音が響く中で、サエキは独り言を呟いた。

サンダルを拾い上げて、舌打ちすると、急にすべてのことがどうでもよくなつた。

「お氣に入りだつたのになあー」

オフホワイトのレースが可愛くて衝動買いした、ウエッジソールのサンダル。

何とでも相性がよくて、今年の夏はこれと黒いパーカーをペリロトだつた。

でも、壊れてしまった。踏み切りを急いで渡ろうとしたら、線路に引っ掛け足を捻った拍子に、ぽっきり。

まるで自分の現状を突き付けられるような気がして、線路の上から動けなくなつた。

あ、そうだ、死のう。

どうせなら最後くらい綺麗なものを見ておくか、と思つて、サエキは首を上に向けた。

風が通つて、少し汗ばんでいた首筋を掠めていく。

髪が揺れた。

爽やかな日。

絶好自殺日和だ。

電車が迫り来る音を全身で感じるには、目を閉じた方が効果的だつただろう。

旋毛から爪先まで走る緊張感。タイミングを図るよつこと、死ぬ間際に、あまりにも野暮だ。

別に、選択の余地が、選ぶ自由があるわけではないのだ、自殺といふものは。

自分の意志で、何かに殺される。

そのことにに対する恐怖を煽るために、五感からの情報を限るべきだ。

それでもサエキは、空を見上げていた。

作り物めいた鮮やかな青を、睨み付けるように。

人の氣も知らないでふざけんなよコノヤロウ。

今から死ぬからな、見とけよバーカ。

後になつて聞けば、この時もし目を閉じていたら、サエキの人生は変わっていた（終わっていた）らしい。

結果から簡潔に言えば、サエキは死なかつた。

「おおおおおう、と、風が鳴る。ぎゃんぎゃんいながら、大きな鉄の箱が通りすぎた。

迫る電車が視界に入つても絶対に瞑らなかつた田は、今なぜか固く閉じられていた。

「線路はやめときなよ」

轟音に混じつて、高さの残る声が耳元で聞こえて、サエキは瞼を上げた。

少年が、口を開く。

「俺の友達、東京で駅員やつてんだよね。大変なんだよ、掃除

抑揚のない話し方。表情にも抑揚がない。

それが、人命救助なんて正義感と優しさの結晶のよつた今さつきの行動とは結び付かなくて、サエキは声を出すのを躊躇つ。

「なんで……」

「はい？」

「なんで止めた」

少年は表情を変えずに答えた。

「言つたでしょ。友達が駅員なの」

「そんだけ？」

「あと、それから

目が青く見えた。

そう言いながら少年は、サエキの目を覗き込む。切れ長の、眠そ  
うな奥二重。黒目が大きい。睫毛が長い。

サエキは、呑気に観察なんかしている自分に気がつく。

「……でも気のせいだった」

「なんで目が青いと助けんのよ。外人好き?」

「いや、てっきりサエキさんは日本人だと思ってたから」「  
は?」

そう声を漏らして、ようやくサエキは頭を使いはじめた。  
状況を理解する必要と、この後のことを考える必要がある。

まず、なんでここにあたしのこと知ってんだ。

相手をよく見ようと、目線を顔から下に下げた。

服装が目に入る。ジーンズにパークー。派手なピンクのチェック。

派手なチェック?

覚えのある表現に、サエキは「あれ?」と呟いた。

童顔に茶髪のショート。顔に特徴ないから、ピンクのパー カー印にしてください、派手なチェックの。

昨日の晩に見た、チャットの文面だ。

「はじめてまして。カナタです」

小首を傾げる田の前の少年に、サエキは口を開けたまま、首を上下に振る。

「あー……ああ！」

「サエキさんでしょ？」

「うん！」

色でわかった、と、サエキと合わせていた視線を、少し上にすらす。カナタの田印が目立つ色のパーカーなら、サエキの田印は髪の毛だつた。

「メールで説明しただけなのによくわかったね」

「わかるよ。こんな髪の人、館町（やかたまち）に他にいないですよ」

あまり明るくない茶色。

それだけなら至って普通、どこででもいすきてなんの特徴にもならない。

でも、サエキの髪は、空だつた。

赤みを抑えた暗い茶に、深い青のメッシュ。

全体に散らばるように入つてはいるが、量のバランスがいいのか、汚ならしい斑とはほど遠い。

色合いは明るくないし、服装だって没個性的なわゆる“流行り”のファッショń。

それなのになぜか田を引くのは、夕暮れが終わつていく空のような、髪色のせいだ。

不思議な色合いの髪に田を奪われて、それが“サエキ”だと気が付い

た。

次の瞬間には、踏み切りのバーを潜っていた。

黒いラインで縁取られた目尻。

気の強そうなメイクとは裏腹に、その表情にはなにもなかった。真っ黒い瞳に空の色が反射して、髪と同じような藍色を作り出していた。

それが、綺麗だと思ったのだ。

だから、空が綺麗だったから、カナタは、サエキを助けたのだ。

「つーかさあ」

独特の脈絡のなさで、サエキは口を開いた。  
「どうか、と前置きをしたが、別にそれまでなにか違つ話題で話を  
していたわけではない。  
それ以前に、話をしてもいなかつた。

「カナタ、すごい童顔なんだね。つーか女顔？ 文面とか大人っぽ  
かったから意外」  
「……別に」

少しだけ顔を背ける。

自覚しているし、コンプレックスに思つてゐるわけでもないが、わ  
ざわざ言られて気分のいいものでもないんだろう。  
カナタにとっては、サエキの遠慮のない話し方も、気の強そうな見  
た目も、少しも意外ではなかつた。

話を逸らすように、カナタは手に持つたサンダルを差し出す。  
サエキは踵の壊れたサンダルで不安定に立つて、顔を歪めた。

「これでいいじゃん」  
「ちょっと、ありえないしこんなショボいビーサン」  
「だつて靴直してゐ間の間に合わせでしょ」  
「だからつてさあ……。無駄な買い物はしない主義なの」  
「この間、服買いすぎて今月ピンチって言つてなかつたつけ？」  
「服は無駄じやないでしょ。着るもの」  
「そんなに買つて、全部着れるの？ そのうち、一日に3回くらいい

着替えなきや いけなくなるかもよ

やりとりだけなら、チャットでの会話とほとんど変わらない。中身のない軽口の叩き合いで掲示板のレスが埋まるのを避けて、わざわざ一人限定のチャットルームを用意したのだ。

それはいつからかメールになり、自然と「//ユニケーションを取つている時間が長くなつた。

カナタが十日ほど前、サエキの住んでる館町に引っ越してきたのをきっかけに、会つて話す方が早いんじゃ、とこうことになつたのだ。

ただ、掲示板でもチャットでもメールでも味わえない、相手が笑つている、笑つてることを感じられる、といつ感覺が、どうも不思議だ。

カナタの田の前にいるサエキは、ウエッジソールのサンダルを3足ほど見比べながら、言つ。

「用事つてなんだつたわけ？ 彼女の呼び出し？」

近くで店員が、行儀良く立つてゐる。

「他のサイズもお出しますよ」とか「色違いもござります」とか、隙あらば話しかけてくるつもりなんだろ。

カナタは、そういうテンプレ的な積極性があまり好きではない。

「違う」

「なにが？」

「彼女はいないよ

「まあ、リア充があんなとこ出入りするわけないか」

「サエキさんは？」

「いないよ。彼氏はね」

「彼女はいんの」

「さあ、どうでじょうね」

ふうん、と、興味なさそりに返す。

サエキは、「これにしよ」と言つて、棚の下に押し込まれた箱を眺めはじめた。

カナタも一緒に屈んで、聞く。

「いくつ?」

「22半」

「ちつちやいね」

「うるさいなー、気にしてんの。そつちだつてそんなにでかくないじゃん。何センチ?」

「いいだろ別に」

後ろに人が立つ気配がした。店員だろ?。

カナタは自分の右横にあつた箱を、「ほら、これじゃない?」と指差す。

箱の蓋をずらすと、コルクの厚底に、薄いベージュのトーションレスが見えた。

サエキが今履いている壊れたサンダルも、似たようなリボンの、似たようなデザインだ(きっと彼女にして見れば、全然違うんだろうけど)。

「……好みは意外と乙女だね」

「うつせこよ」

「せつめ、無駄な買い物はしないって言つたじやん」

斜め前を歩くサエキが振り返る。

カナタは、キー ホルダーを手に揺らしてみせた。

半眼との字口が、妙に可愛いらしい猫のマスクコット。手足が細長くて、三角形の上に台形を重ねたような体型をしている。箱を抱えてレジに向かつたサエキが、戻ってきた途端にカナタに「レジ横に可愛いのあつた。あげる」と手渡したのだ。

「「」ー もうのは無駄じゃないのー」

「ど」が?」

「お近づきのしるし。カナタに似てたから」

「え? はあ……ども、ありがと」

反応うつすーと、サエキが笑う。

カナタは感情が見た目に出来ないというだけで、中身まで抑揚がないわけではない。

でも、それをわかつてくれる人は今のところ、一人もない。

これに似てるのか俺、と、眠そうな猫の人形を眺めて、口を開いた。

「でも、やっぱ意味ない気がする」

「キー ホルダー? 素直に受け取つとけよー」

「サエキのサンダルも。……どひせすぐ履かなくなるじやん」

今が秋だから、といふ意味ではない。  
この先ずっと、といふことだ。

「誰か履くかもしないじゃん」

「姉妹とかいんの？」

「えーと……今どこにいんのかわからんない姉ちゃんが」

「……どうせだから最後に全部売つてさつぱりしちゃえば?」

二人が話しているのは、将来のことだった。

近い将来。

そして、その先はない。

「うーん売るかあ……」

「どのくらいになる?」

「服とか靴とか……ゲーム、CDに漫画に……十五万は下らないかも。でもそのお金どーすんの?」

「最後に使えばいーじやん」

「えー? なにに使う?」

「演出? 十五万もあれば結構色々できるよ」

「例えば?」

「んー……豪華ホテルの一室で、派手なドレス着て、とか

「あ、ちょっとそれ色々考えよつ。どんなのがいいかな」

来週の旅行、どこに行こつか。

ちょっと遠出してみたいよね。

そんな話をするノリで、カナタとサエキが話しているのは、人生の最期の彩り方だった。

「やつぱどーせ死ぬならさー、派手にいきたいよね

よん

【自殺】今までにない死に方を考える【方法】

327 名前：名無し : 20XX/X/X (水) 23.18  
ID : ???

ちょっとと聞いてくださいこう

328 名前：名無し : 20XX/X/X (水) 23.19  
ID : ???

今日、踏み切りに突っ立つてたら、助けてくれた人がいて

329 名前：名無し : 20XX/X/X (水) 23.21  
ID : ???

飛び込み？ なんでもまた

330 名前：名無し : 20XX/X/X (水) 23.23  
ID : ???

や、特に理由ないんですけどー

なんとなく、今しんでもいいかなー？って

331 名前：名無し : 20XX/X/X (水) 23.28  
ID : ???

飛び込みは絶対やめた方がいい

汚いし失敗した時が最悪

332 名無し : 20XX/X/X (水) 23.35  
ID : ???

俺が今日乗った電車も止まつた  
おかげで仕事に1時間半も遅刻

333 名前：名無し : 20XX/X/X(水) 23.39  
ID : ???

ね、ふつーそーゆう止め方するでしょ  
なのにそいつ、俺の友達が駅員だからって  
掃除大変だからやめろって  
なんか馬鹿馬鹿しくなりましたw

334 名前：名無し : 20XX/X/X(水) 23.40  
ID : ???

無責任  
つーか自分勝手

335 名前：名無し : 20XX/X/X(水) 23.43  
ID : ???

そんなどこで死のうとする方が自分勝手だろ  
自分本意ではあるけど正論

336 名前：名無し : 20XX/X/X(水) 23.51  
ID : ???

てゆうか、今時自殺止めるとか  
まじかっこよくなないですか? w

337 名前：名無し : 20XX/X/X(水) 23.56  
ID : ???

確かに、なかなかいない  
本気で死のうとしてる時に現れたらやだな

338 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·01  
ID : ? ? ?

でも訴えられても文句いえない

339 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·06  
ID : ? ? ?

裁判つて時間かかるんじやないの?  
訴えてる暇あつたら死ぬわ

340 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·11  
ID : ? ? ?

死ぬ前に金使つなら、何に使います?

341 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·20  
ID : ? ? ?

## 風俗

342 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·25  
ID : ? ? ?

好きなもの腹一杯食つ

343 名前・名無し : 20XX/X/X(木) 00·32  
ID : ? ? ?

342 < <

その後首吊りか薬飲んだら、全部垂れ流しちゃうけど

From: サンキさん

件名：なし

20XX/XX/XX 00:32

本文

なんていきなり話変えちやつたわけ?  
あれカナタでしょ笑

TO: サエキさん

件名印

۲۰۱

別に。

てゆうかなんでおんなんこと書いたわけ？

From: サエキさん

件名

20X

本文  
：

怒りでNo!

TO : サニキさん

件名 : Re : Re : Re : Re :

2  
0  
X  
X  
/  
X  
/  
X

0  
0  
:  
4  
9

本文：

でもやめた方がいいと思うよ、叩かれるのサエキさんだから

From: サンキさん

20 X X / X / X

00 : 52

本文 :

心配してくれてんのかー(・・)

明日ひま?

「サエキさんはさ、一人で死ぬのが嫌なわけ?」

呴えていたストローを離して、カナタはぼそりと言った。  
少なくともサエキが見たことのあるカナタはいつも、こんなふうに  
声低い喋り方をする。

声変わり前の中学生のよつたな声を、気にしているのだろうか。

「んや、別に?」

「じゃあなんで俺と会おうとか言つたわけ?」

「なんとなくだよ。どんな人間なのか気になっただけ」

「そんな気になるほど面白い書き込みした覚えないけど」

田立つ方でもなかつたじやん、と呟いて、カナタはフォークを口に運ぶ。

サエキが立ち上げた『他にない死に方を考える』と題した掲示板に、半年ほど前のある日、新参らしい書き込みがあつた。

丁寧語なのに生意氣さが滲み出た物言いや、やけに幅広い知識。多少アブノーマルな内容の掲示板なら、そのくらいの変わった人間は「ゴロゴロ」といいる。

カナタが他と決定的に違つたのは、その物の見方だった。

自殺志願者の集まる掲示板で、自殺を勧めることは絶対にせず、かといって止めもしない。

方法に関するても、痛くも苦しくもない楽な死に方を考えるのではなく、タイトル通り、まさに『他にない死に方』を考えるために議論だけしていた。

生に対しても、死に対しても、何の執着もない。  
生きなくていい。それだけ。

死にたいと思つて積極的に死に方を探す自殺志願者たちが、カナタと比べれば、とても行動的に見えた。

「あたしさ。楽に死にたい、っていうの、ちょっと違つ『氣』がして」「違うって？」

「だつて死ぬんだよ。それって、決めるまでに散々悩んで考えて考えて考えて出した結論じゃん。あたしが思うに、自殺の一一番大変なところって、最初に自殺しようと決めるところだと思うわけだ」

「ふうん」

返事適當すぎ、といつサエキの非難の声に、カナタは少しだけ眉を顰めてみせる。

場所はファミリーレストラン、時刻は夕方6時半。  
あまりにも状況とミスマッチな会話に、真剣な返事なんて返していたら、明らかに怪しい一人だ。

「カナタはさ。楽な死に方なんて、一個も考えてなかつたじやん」「あれは……別に、思い付かなかつただけで」「うそ。考えようとしてなかつたんじゃないの？」「まあ、確かに……楽に死にたいと思ったことはないよ」

サエキは一つ頷いて、オムライスを口に運んだ。

ふわふわトロトロとはほど遠い食感だが、構わない。食べられれば何でもいい、とまではいかないが、サエキは意外と味に頓着しないほつだった。

無表情でカルボナーラを頬張るカナタに、サエキは言つ。

「すつ」い不味そうな顔して食べてんね

「うん、不味いからね」

「まじ? あたし別にそうでもないけど」

「サエキさん、どんな舌してんの」

見るからにパサパサの卵と、不健康そうなケチャップ色のチキンライスを見て、カナタが言つ。だがその表情にも声色にも一切の感情を感じさせないので、サエキも今一何も感じない。

「あたし、食べ物にはこだわんなことにしてんの」

「なんで?」

「だつて死ぬまでに美味しいもの食べ過ぎて、いざ死のうとした時に、あーあれもう一回だけ食べときたいなあ、なんて思つて、死に損ねたら嫌じやん

「意思弱すぎだよ」

「ね、あのキー ホルダー、使つてん?」

唐突に変わった話題に、一瞬頭がついていかなくて、カナタは口籠つた。

口の中でもたもたと留まる冷たいパスタを無理矢理咀嚼して飲み下して、アイスティーを一口飲んでから、口を開く。

「サエキさんさ、いくらなんでも脈絡なあすぎ」

「カナタお行儀いいね」

「まともに会話する気あんの?」

「じてるじやん、今」

一体どんな会話をして育つてきたの、と言つたら、サエキがにこりと笑つた。

真意がまったくわからなくて、カナタは片方の眉を動かす。

「キー ホルダー、使つてるよ」

「ほんと? 何に付けてる?」

「……自転車の鍵」

「へー。自転車、乗るの?」

「乗つてない」

サエキが唇を尖らせて、「それ使つてるって言わないじゃん」と文句を言つ。

子供みたいな仕草だと、カナタは思つた。同時に、子供は絶対にしない仕草だろう、とも。

「結局ね、あたしが一番気になんのは、垂れ流しつてことなんだよね」

「しょうがなによ、それは。人間の体がそういうふうに出来る以上は」

「田舎で首吊りとかしちゃつたら、部屋中臭いとかひどいわけですよ？ 全部白無しじゃん」

「そんなこと言つたら、本当に綺麗な死に方なんてそうないよ？」

「一酸化炭素は？」

「死んだら筋肉が弛緩するからね。どんな死に方でもだいたい垂れ流すことに変わりないでしょ」

「薬も種類によるのかなあ……やつぱしづめりく飲まず食わずにかかるのか」

「食べたものは薬でも飲んで出せばなんとかなるけど……水分はそもそもいかないね」

「あ、そっか……」

うつぶと、とサエキが唸る。考え込むような、真面目な顔。

カナタは、鼻で溜め息を吐いて、言つた。

「爆死は？ 弛緩する筋肉も残らないよ」

「原型留めないのは嫌だよ、身元もわかんないかもしないじゃん」

「わがまま」

「水死も見た田舎いし、最悪発見もされないしなー」

腕まで組んでぶつぶつと呟くサエキに、カナタは言つた。

「川なうじう？」

「かわ？」

「どっか山ん中入つていつて、上流の方から遺書何通か流すの。そんで薬か、腕切つて水につける。垂れ流しても川に全部流れるし、ロケーションもいいし、遺書見つかれば探してもらえるし、川は浅いから発見はそんなに遅れない。血は残らず抜けるから真っ白になっちゃうけど、それはそれで綺麗」

抑揚のない声で語られる淡々とした説明は、それでもサエキの脳内に、一つの情景を浮かび上がらせた。

青空の下、じうじうと流れる川に体半分浸かつて、眠るように目を閉じている自分の姿。清々しい緑に囲まれた、真っ黒な服の、真っ青な死体。水に濡れた青い髪が顔に張り付いている。

神秘的で幻想的で、どこか耽美的な、美しい自殺現場。

「考え方

小さく笑つて一言そう言つたサエキの意識は、その瞬間だけ、冷たい水の中で死んでいた。

カナタの携帯電話に、知らないアドレスからメールが届いたのは、その夜のことだった。

数年前のあるアルバムの、表題曲のサビが、低音質で数秒鳴る。カナタが唯一好きな歌手の、唯一買ったCDだった。

誰からのメールかは、わかつている。

サエキだ。

ファミリーレストランでの気だるげな食事のあと、彼女に押しきられる形で、アドレスを交換したのだ。

今までだつて何度もメールのやり取りはしていたが、それはチャットで教えた、サブアドレスでだった。

携帯電話は静かになる。

しかしカナタは、それを聞く気になれなかつた。

背面ランプが、青く点滅する。

一回光つて、忘れた頃に、もう一回。その繰り返し。  
それがうずつくなつて、手を伸ばして、携帯電話を引っくり返した。

裏返してもなお隙間から漏れる小さな光に、カナタは、帰宅してから、電気をつけていなかつたことを思い出す。

少し腰を浮かせばスイッチには届くが、それもしない。  
何もしたくないと感じた。

どれだけ小さな光でも、まわりが真つ暗だと、こんなにも明るく感じるのだ。

こんなに小さな光が明るく感じるのは、まわりが真つ暗だからだ。

無性に苛々した。

長いシャツの袖を、捲る。

白いTシャツだから、汚れれば洗濯が面倒だ。

脱いでしまおうかとも思ったが、それも嫌だった。

机の引き出しを、ゆっくりと開けた。

文房具やなんかが無造作に詰め込まれたそこに、あまりこ自然に溶け込んでいる、武骨なそれ。

かち、かち。久しぶりに聞いたその音をBGMに、思い浮かんだのは、なぜかサエキの顔だった。

死にたいと願う少女。

そのくせ、頭に浮かぶのは、唇を歪めて、涙をぽろぽろ流して、恐怖に怯えた顔で命を乞う姿。

(苛々する、)

残像を搔き消したいと思つた。できるだけ荒々しく、できるだけ残酷に。

暗い部屋で、裏返された携帯電話の灯りが、どこかで光る。

血が煮えるような感情の昂りを、治めるには 血じと流し出すのが一番だ。

カナタは、カッターの刃を、細い手首に添えた。

(最近、連絡ないな)

いらっしゃいませえ、とやる氣のない声を聞きながら、サエキは携帯電話を見た。

夕方から入っていたアルバイトも、もう終わりだ。忙しくはなかつたが、疲れはした。

夏の終わり、コンビニエンスストアの店内は寒い。外が涼しくなったのだから店内の空調の設定温度も上げればいいものを、なぜか世間は、女性の体に優しくない。

Tシャツの上に羽織ったパステルイエローのパークーに、思い出したのは、コンビニ店員なんかよりもっとやる氣なさげな、あの顔だった。

お疲れさまです、と、声をかけて、お菓子の棚を眺める。

チョコレート菓子とスナック菓子で悩んで、「太るよ」と言つカナタの声を想像した。あの無表情で、でも言つたあと、ほんの少しだけ笑つて。

(電話、してみつかな……)

カナタなら、出ないだろうと考える。

メールの返事だって半日遅れが当たり前なのだ。

コミュニケーション能力の低さなら、サエキが今までに会った人間の中で、群を抜いている。

結局カゴに菓子を二つ入れながら、携帯電話を取り出す。  
十日ほど前にはじめて本アドレスで送ったメールの返事は、まだ来ていない。

雑誌の表紙を流し見て、飲み物のコーナーで一度立ち止まる。小鳥がサイレンを真似したような音と、「らっしゃーっせえー」という、舌の回らない掛け声が響く。

(なんか忙しいのかな)

それとも、避けられているのか。

サエキの頭では、他にメールを返さない理由は思い付かない。

力ナタの声が聞きたい。

自然にそう思っていた。自然にそう思つたことに、驚いていた。

やる気なさげな、少し眠たげな、生意気そうな高めの声。ぼそぼそと、口を大きく開けない話し方。

声が生意気なら、言うことはもつと生意気だ。一応敬称をつけてはいるが、そこに年上の人間にに対する遠慮や敬意は、少しも見られない。罵詈雑言も平然と口にする。

それでも、今無性に、力ナタの声が聞きたかった。

(やつぱ、電話しよ)

1・5リットルの緑茶のペットボトルを手に取る。  
そして、弁当の棚へと、振り返った時だった。

思わず、声が出た。

「……カナタ？」

切れ長のたれ目はこちらを向いて、一瞬大きめに開かれた。  
そしてそのあと、カナタの顔に浮かんだ表情は、『しまった』とで  
もいうようなものだつた。

サエキは、なにか言おうとして、口を開いた。

「力ナ、  
「千空ちゃん」

しかし、背後から突然かけられた声に、驚いて振り返ってしまう。へら、と曖昧な笑顔を浮かべた、アルバイト仲間の姿があった。

「千空ちゃんも今あがり?  
「え? あ、はい」  
「もう帰る? 送つてこつか」  
「あー、いや、大丈夫です」

空気の読めねえ奴、と心の中で悪態を吐きながら、同じくらい曖昧に断りを入れる。

先輩の好意（下心があつたとしても、恐らく、大抵の場合、親切心に変わりはない。例外もあるにはあるが）をはつきりと断るのはなんだか気が引けて、首を横に振るのはやめておいた。

両手をダム代わりに胸の前で開ぐが、それで彼の勢いが塞き止められるわけでもない。テトラポットの役割すら果たさなかつた、といつていい。

「でも、外真つ暗じやん。女の子一人じゃ危なくない?」「へーきですよ、家、近いし」「そう? なんかあつてからじや」「あー……えつと、一人じゃないんで。ちょうど近くに友達いて、

これから会つていいか

そう言つた時、先輩の顔ははつきりと、あまりにもわかりやすく、  
がっかりした色を浮かべた。

例え下心よりも親切心の方が比率としては大きかつたとしても、なんとなく、そういう事態は避けておきたい。

すんません、今はあんたなんかどうでもいいんで。やはり心の中で  
だけ詫びを入れて、「それじゃ、お疲れさまです!」と、レジに向  
かつた。

カナタの姿はすでに、見当たらない。

「あそこ」で帰るか、ふつー

あんなタイミングでサエキの前に現れて、その上こんなタイミング  
で姿を消すなんて。しんじらんねー、と、唇を尖らせながら、店を  
出る。

あんな表情を浮かべられたら、なんとなく、引き留められなかつた。  
メールの返事が来なかつた理由も、想像がついてしまつたのだ。

下を向いて、菓子の入つたビニール袋がガサガサ揺れるのを見ながら歩いていると、視線を落としたコンクリートの先に、見慣れたスニーカーが見えた。

サエキは顔を上げる。

カナタは片手を挙げた。

「おつかれ」

パークーにジーンズ、といいつつもの格好で。  
感情の読めない無表情で。  
少し気だるげな立ち姿で。  
サエキがあんなに聞きたいと思っていた、抑揚のない声で。  
カナタがいた。

「……帰ったのかと思つた」

サエキが呟く。拗ねたような声色になつていて、内心で舌打ちした。

なんとなく、距離感を掴めない。

たつた十日。のブランク、なんてことはないはずなのに。久し振りじゃん、と言つて、どうしてメールの返信をくれなかつたのか、なにか新しい自殺のアイディアでも思い付いたか、カナタの返事があつてもなくとも、とにかく口だけ動かせばいいはずなのに。なぜか、サエキの唇は、開きづらかった。

「家……、近所なの」

やつと一言、呟く。言つてから、話題の選択を明らかに間違えたと気付く。

カナタは前を向いて、壁に背中を預けたまま、呟つた。

「チアキつていうんだ？ 本名」

これは、仕返しだ。踏み込んだことを聞いたことへの仕返しと、牽制。

サエキは少し苛立つて、さつきよりも大きな声で呟つた。

「聞いてんの、あたしなんだけど  
『教えない』

カナタは正面を向いたままだ。

サエキは、横に並んだ。冷たいコンクリートのブロック塀。  
それから、気付く。この声が聞きたくて、しょうがなかつたのだと。

「……けち」

「なんて字書くの？」

カナタは、マイペースに言ひ。  
それがほんの少しだけ可笑しくて、サエキは顰めた眉間に緩めていつた。

小さな声で、ぼそりと答える。

「……十の空」

ふーん、とカナタが囁いた。聞いておいて、薄い反応。  
しかし、それがカナタなりの相槌だと、サエキは知っていた。まだ  
出会いつて日は浅いが、きちんと知っていた。  
サエキが真っ直ぐに立って歩き出すと、カナタは当然のように隣に  
並んでいる。

「ね、なんでメール返してくんなかつたの？」  
「……あれ、返してなかつたつけ」  
「きてない。忘れてた？」  
「あー、うん。忙しくて」  
「それだけ？」  
「それだけだよ。なに？」  
「んー、や……、あたし暇だった

隣から、くすりと笑う気配が聞こえた。

「掲示板にいればよかつたじゃん」

「最近めんどくさい人いてさあ。すげー喧嘩腰なんだよね」

「ほつとけばいいよ」

「なんでもかんでも首突っ込んでくんの。ちょっとすれば飽きたと思うけど」

「じゃあしばらくチャットに籠つてよーか?」

「うん、」

カナタが歩くのが速いのか、サエキの歩くのが遅いのか。

右を見上げると、いつの間にかサエキを少し追い越していた、カナタの横顔がある。視線を落とした。

パークーの袖に隠れた、手。細くて綺麗で冷たくて、サエキは少し、気に入っている。

ポケットに突っ込まれっぱなしのその袖を、くい、と引いた。カナタが振り返った瞬間、悪戯が見つかってみたいに、どきりとする。

「、ん?」

「……手、繋いでいー?」

わずかに空いた間に、緊張。

「なんで?」

「好きなの、人の手触るの」

ふうん、とまた氣のない返事をして、カナタは「いいけど……、」と、口籠つた。ちらりと、後ろを一瞥する。

そして、

「うう。」

と言いながらサエキの腕を引く。

カナタの右手と、サエキの左手が触れた。男性的なゴシさのない、けれど女性的な滑らかさもない、冷たい指先。

カナタの横顔を黄色い光が照らして、すぐ横を、車が通つた。  
歩道のない細い道だ。

「……あ」

また、どきつとした。

少し鎧びた街灯の下で、サエキは立ち止まつた。海風の吹かない場所のないこの町では、自動車も自転車も、街灯もポストも、すぐに鎧びてしまつ。

サエキの手に引かれて、カナタも立ち止まる。

「いいでいいよ。そこで、曲がったところだから」

「……やつ」

なぜだか、サエキから手を離すのは躊躇われた。勝手に繋いで勝手に離すなんて、と思ったわけではない。そんなことは少しも気にしてないほどにはサエキは大雑把な性格だし、わがままなところもあつた。

単純に、離したくなかったのだと気付いたのは、少しあとのことだ。

「それじゃあ

カナタから動くのを待つてはいたのだが、あつさりと離れていった温もりに、どことなく淋しさを感じる。カナタが振り返る。一瞬、目が合つた。

「おやすみ、……千空ちゃん」

聞きたくて聞きたくて仕方がなかつた、カナタの声。低いテンションで名前を呼ばれる。

こんなに何の感情も籠らない声色で名前を呼ばれたのは、はじめて

だつた。それなのにおどけた口調に、ムツとする。握った右手で、カナタの肩を小突く。

「サエキって呼んでよ」

「…………サエキさん」

「なに?」

「おやすみ」

なんとなく、顔を上げられなかつた。

でも、俯いたまま別れるつもりもない。せめて何か一言言おうと、と思う。

口を突いて出たのは、別れの挨拶でも、「おやすみ」と返すでもない、往生際の悪さだつた。

「カナタも本名教えてよ。……あたしだけとか、不公平」

「不公平って……なにその理屈」

「いーから。名前、なんてゆーの?」

自分の表情と口調が、拗ねたみたいになつてゐることは、サエキも自覚していた。こんなタイミングでこんな話題しか思い付かない自分に、苛立つていたのだ。

けれど、カナタの本名を知りたいのは、事実だつた。不公平だとかそんな理由ではなく、ただ、カナタのことをもう少し知つておいてもいいんじゃないか、と思つたのだ。

やつと顔を上げて、顔ごと逸らしているカナタをじつと見つめていると、たつぱり1分はありそうな沈黙のあと、カナタが口を開いた。

「……夜」

そうしてぼそりと呟いたのは、言葉一つだつた。

シンプルな名前。無駄を好まない、カナタにぴったりの名前だと、単純にそう思った。

「……ヨル？」

「うん」

「そ……夜」

「なに」

「よる、」

「いいよ、呼ばなくて」

「だつて、夜」

「なんだよ」

「どしたの？」

「……なに、が」

掠れた声。カナタの声も、サエキの声もだ。

カナタは目を伏せていた。長い睫毛から、目を離せない。

「泣きそうな顔してる」

たぶん、そう感じたのは、サエキだからだ。

本当はきっと、泣きそうなのは、サエキだった。理由はわからない。白い瞼が、ゆっくりと上がっていく。間近で、サエキを見る。本当に泣いているような無表情だった。

「……嘘言つてんじやねえよ  
「嘘じやない。……ねえ、よ

夜、と呼ぼうとした声は、不自然に奪われた呼吸の中に、搔き消えた。



## 「IJKの間」

なんでもまたこの人と一緒にいるんだろ?と思しながら、カナタは口を開いた。

サエキがふい、と顔を上げる。

今日は天氣がいい。青と茶の髪が、緩やかな風にさらりと揺れる。

「なんで、線路に飛び込んだりしたの」

遠くで、子供のはしゃぐ声が聞こえた。  
うるさい、と感じる。カナタは、子供っぽい人間は嫌いではないが、  
子供は苦手だ。

「なんでかなあ」

「轢死と首吊りはしたくなって言つたじやん

「なんとなく……まあ

サエキが、足元を覗き込みながら呟く。

「なんとなく、今ならいけなかつて思つたりやって」

「……冷静じゃないね」

けらけらと笑い声を上げる、三人の幼児を、サエキは機嫌良さそうに眺めている。子供は嫌いじゃないらしい。

「意外と人いるね、連休でもないのに  
「もつと上流の方まで行けんのかな」

川なら、排泄物も血も全部流れる。水温が低いから腐食も遅いし、遺書を何通か川に流せば、発見が遅れたりもしないだろ？。  
考えておく、と言ったあの言葉は、本気だつたらしい。

とある秋の週末、カナタとサエキは、一人でキャンプ場に来ていた。

「冷静じゃない、ねえ……」

どこか含みのある言い方が気になつて、カナタはサエキの方に顔を向けた。サエキは、相変わらず走り回る子供を見ている。  
こちらを向かないまま、言った。

「冷静じゃないのは、カナタの方じゃん……」

カナタは、サエキの視線の先と一緒に眺めるふりをした。  
責められているような気がしたからだ。サエキは明らかに、数日前、コンビニで偶然出会した夜のことを言つている。

自分でも、少し反省している　といつも、どうかしていた、とあ  
の後思つた。

避けていたのだ。そして、サエキも明らかに、カナタが避けている  
ことに気付いていた。適当に言い繕いはしたが、あんな言い訳、言  
い訳にするなつていない。それなのに。

自分に説明のつかない行動を取つたのは、カナタが認識する限りで  
は、はじめてのことだ。あんな、自分から距離を縮めるようなこと。

いつの間にか『カナタ』と『サエキさん』に戻つた呼び名が、余計  
にあの言動を思い出させる。

なんでもないふりをするのは、なにかがあったからなのだ。

カナタは、サエキを見た。虫除けのためにか、ふらふらと揺れたり跳ねたりしている。

いつもも増して飄々としたこの態度はつまり、カナタにも何もなかつたふりをしていてほしいということなんだろうか。そのくせ、時々ぼそりと、カナタの心臓がどくんと反応するようなことを言って。

振り回されている。そう感じた。

正直、少し、不快だ。

そもそもサエキに出会つてから、カナタの人よりゅつくりとしたペースは、崩されっぱなしなのだ。

苛々はしないが、体力と精神力は消耗する。“なんでもないふり”が、ストレスを溜める。

そこまで考えて、思考は結局、振り出しに戻つた。  
どうして自分はこんなところにいるんだろうか。

堂々巡りに陥るカナタの耳に、突然、金切り声が飛び込んできて、わずかに眉を顰めた。

「マリー、いら、走らな……！」

「おわ、つと」

遠くからした女性の声が、不自然に途切れる。

振り返ったカナタの目に飛び込んできたのは、なぜか尻餅を突いたサエキだった。

「あーあーもう、だいじょーぶー？」

よく見れば、3、4歳くらいの小さな女の子が、その腕に抱かれている。

つまづいたのを庇つて、一緒に転んでしまったらしい。

「ありがとー、おねーちゃん」

「へへー、」

サエキが嬉しそうな顔をする。やはり、本当に子供が好きなようだ。緩んだ表情で、どういたしまして、と言おうとした時、少女の母親らしき女性が、血相を変えて走つてくるのが、カナタには見えた。

「マリー！？ あ……ちの子がすいません、 本当にー。」

「え？ や、別にそんな……」

「ほりマリー、お父さんが呼んでるからこいつ。本当にすみませんでした、もう遊びませんので」

ペコペこと何度も頭を下げているが、決してサエキと田を合わせようとしている。サエキが少しでも文句を言えば現金でも出しそうな勢いだ。

だが、大丈夫ですかとは一度も言わなかつた。

サエキもその理由に気付いたのか、少し呆けたような顔をしたあと、苦笑いを浮かべて、静かに「気にしないでください」とだけ言つた。

母親と少女が振り返つて歩き出すのを見送りながら、サエキは自分の髪に手を伸ばす。

カナタはその横顔を、黙つて見ていた。

深い青が混じつた、暗めの茶髪。色白の肌と相まって、ビニカ浮き世離れした印象すらある。

茶髪にピアスは不良、とまではさすがにもう誰も言わないが、それなりに奇抜な外見をしていれば、関わらない方がいいと普通の人は思うだろう。

小さい子供がいるならなおさらだ。自分の子供を、危険そうな人物にわざわざ近づける親などいない。

(……確かに、ちょっと怖いけど)

そういう反応、そういう世間の田を承知の上での色に染めたのなら、あんなに傷付いた顔、することないのに。

思わず声をかけようとして、サエキの名前が喉まで出かかったところで、踏み止まつた。

名前を呼んで、何を言つつもりだつたんだろう。

自分でも予測していなかつた自分の行動に、カナタが一人戸惑つて

いた時だつた。

あどけない声が、サエキの顔を上げさせる。少し離れたところから、一生懸命声を張り上げて。

「おねーちゃん！」

サエキの目が、丸くなつた。ただでさえ丸い目が、くりんと大きく見開かれる。

足場の悪い草地を、足早に歩く母親に手を引かれて。その上無理に振り返るせいで転びそうになりながら、マリと呼ばれた少女は、叫んでいた。

「かみー、きれーだねー！」

それを聞いたサエキは、笑つていたのだろうか。カナタは彼女の方を見なかつたから、わからない。

嬉しそうに、満面の笑顔を浮かべていただろう。そう直感的に思つたから、サエキの顔を見なかつた。

自分が人の笑顔が苦手なのはどうしてなのか、カナタはいまだに満足できる答えを見つけられていない。

「ねー カナタ遅いー」

「サエキさんが速いんだよ」

もう疲れたの?  
ちよつと歩いただけじゃん、弱づちいなあ

うるさい、と雑に返事をして、カナタは足許に集中することにする。形も大きさも少しの統一性もない石が「ころころ」と転がっていて、ちよつと気を抜いただけでもバランスを崩しそうだ。

「キャンプ場に来てなんで」「んな」とつてんの、俺ら」

の  
レ

「インドアだよ。ついでに社会不適合者」

「あたしはアウトドア派なのー」

「自殺志願者のくせになんでそんなに元気なわけ？」

「あたし別に自殺したいわけじゃないよ。死んでもいいだけで」

『元田彌介』

岩、と言つていいような大きな石を乗り越えて、カナタは一息ついた。サエキもそれ以上進もうとせずに、立ち止まっている。横に並んでみると、その先是少し切り立つたようになつていて、ジヤンプしても、ちゃんと着地できる自信がないのだろう。

溜め息を吐いて、力ナタは足許に手を突いた。

「いて」

飛び降りて振り返つてみると、サエキはカナタの胸よりも高い位置に立つている。足の裏がぴりぴりした。

べつたんこのスニーカーで、サエキならば自分の肩より上の高さから飛ぶのは、さすがに躊躇してもおかしくない。

「ほり

両手を伸ばすと、きょとんと見返された。  
はじめてサエキを見上げた気がする。

「え」

「早くしないと、その辺蚊いたよ」

「え、え、嘘」

慌てて伸ばしてきた手のひらが、小さい。

全然違うな、と、擦れ違った自分の手と見比べて思つ。

「大丈夫？」

「あんなちっちゃいガキにぶつかられたぐらいでコケるサエキさんと一緒にしないでもらいたい」

「飛び蹴りくらわすぞテメー」

「いーの？ 受け止めてやんないよ」

カナタの肩に、サエキの手が触れた。すでにほとんどの体重をかけているはずなのに、たいした負荷ではない。  
ほんとにちっちゃいんだな、と思つた瞬間に、サエキの足が土石を離れた。

「なんかカナタが初対面の時以来一番かつこよく見えたわー」

「セリヤビーも」

「つづるー」

「なにがだよ」

ぼす、と効果音でもつきそつたほど軽いサエキの体は、足が地面に着くと同時に、するりと離れていった。

同じような作りのはずなのに、恐ろしこまでの差を感じる。

なんだか、異様に脆くて、異様に儂くて、あまりにも簡単に。

(……死んじゃった)

岩場を器用に歩く後ろ姿を見て、カナタは思った。

サエキがぽきりと折れるように死んでいる様子を想像しかけて、意図的に、2秒でやめた。

「そんな靴でこんなところ歩けると思つた神経がすげい。尊敬する。まじ感服」

「わかりやすく馬鹿にしてんだろ。うつせーよひきこもり」

「ひきこもってないよ。サエキさんに引きずり出されてるじゃん。こんな山の中まで、わざわざ」

「ありがたく思いなよ」

「それはこっちの台詞でしょ。俺とオフで会つことになつてなかつたら、一人で来るつもりだったわけ？ 休日のキャンプ場に。死に場所探してんの見え見えじやん、そうじやなかつたら相当痛い子」

「は？ 来るし、普通に来るし。バンガロー借りてタクシーで口

口運んで思いつきり楽しむし。なめんなばーか」

「今この状況でサエキさんに馬鹿つて言われる」とほど心外なこと

つてないね」

「あたしは馬鹿なんじゃないもん。ちょっと……一歩ツメが甘いといつか」

「てゆーかこの状況がツンでんだよ、サエキさんのせいで」

一通り軽口を叩きあつたところで、カナタは盛大に溜め息を吐いた。適当な石の上に座り込むサエキの膝には、血が滲んでいる。それを見て、もう一度溜め息を吐く。

そもそもこのキャンプ場へ来たのは、川の上流に、いい自殺スポットがないか探すためだつた。

その目的は、概ね達成されたといつていい。

今一人がいるのは、散策コースからもかなり外れた川原だ。うつし

つした岩場を越えなければ来られないの、川釣りに来た人でさえ、ここまで入つて来ていないだろ。

「ちょうど六場だね。やつたー」

「そのせいで今身動きとれないんだけどね」

間髪入れずに返したカナタを、サエキが横目で睨み付ける。  
このぐらいの皮肉は許してほしいものだ、わざわざバスでキャンプ場まで来て、あの岩場を越えて、掛け句の果てに遭難までしかかっているのだから。

そこそこ歩いたが、それほど上流まで来たわけでもないのだが。  
川幅はそれなりにあるし、見上げる限り、そんなに高いところまできたという気もしない。

しかしそんなことより、今はサエキの手当てだ。  
彼女の背負っていたリュックサックの中に、コンビニに売っているような応急処置セットが入っていた。

「……準備万端じゃん」

「任せろ」

「ぜつてー任せらんねー。ま、立つて」

「えー?」

「傷口洗うから」

サエキの手を引いて、川岸まで連れて行く。  
わりと緩やかに流れる浅いところに屈ませて、大雑把に膝に水をかけた。

「いつ……た、」

結構傷が深いようで、擦り傷特有の、滲み出るような出血の仕方じゃない。砂や大きい「」みは洗い流せたのだから、あとは手で抑えてでも止血すればいいだろ。

そう思つて、流しても流しても溢れてくる血をそのままに、立ち上がりうとした時、だつた。

「……カナタ」

袖口を引かれる。  
バランスを崩すほどではないが、ペースを崩されるには、十分すぎるほどだった。

神妙な顔を、自分が手をかけるカナタの腕の方に向けている。  
それが左腕だったので一瞬構えてしまつたが、サエキの言葉は、そんなことよりも、あまりにも予想外だった。

「……ごめん」

見様によつては不機嫌そうにいたれる表情。  
ぶつきらぼうにも聞こえる声色。

それが、サエキの照れ隠しなのだと気付いてしまつたことが、カナタにとつてその日一番の不覚だったかもしれない。

「『めん、……こんなとこまで連れてきて、怪我なんかしちゃつて  
「……サエキさん  
「なんか……その、正直……。ちょっと、楽しかった、って、いう  
か  
「え？」

「ほんとに気楽なの、久しぶりだ、し

「……」

「だから、チヨーシに乗りました、ごめんなさい」

正直に言つて。そう、率直に、そして平たくいうなら。

謝られるなんて、思つてもみなかつた。

サエキだからではない。確かに奔放でいい加減だが、礼儀知らずなわけではないことは、ネット上も含めれば決して短い付き合いではないカナタは知つてゐる。

驚いたのは、カナタだからだ。もうすぐ死ぬかもしれない人間、もしくは　これは、同意の上、というか、サエキに頼まれればの話だが　自分を殺すことになるかもしれない人間に對して、そんなふうに接するなんて。

そこまで深く考へての行動ではないかもしない。

カナタがあまりにも文句を言つから、とりあえず謝つた方がいいと思つただけなのかもしない。

それでもなんとなく、カナタは、軽いショックのようなものを、感じていた。

「……カナタ？」

…… そんなの。

やめてほしかつた、そんな、まるでカナタが善意からサエキを助けていると、思つてゐるような言い方は。

サエキが自分のことを、どんな人間だと思っているのかは、わからなけれど。

なぜだか急に、妙に、それを崩したくなつた。



「……カナタ、どーしたの」

「……なんで謝ったの？」

「え、だつて。怪我人連れてさつきの道戻るの、大変じゃん」

無防備にそんなことを言う。

カナタの纏う空気が変わったことだけは気付いているのか、伺うよ  
うな上目遣い。

それが、余計に、なにかを操った。

「へーきだよ。……だつてそれ

サエキの細い首に、手をかける。

「……でサエキさんを殺しちゃえば、戻るのは俺一人だもん」

ね。と小首を傾げる。

サエキの表情は、思つたほどじみつきと変わっていなかつた。少し  
つまらない。

やはり死や、殺されることへの恐怖というものが、薄いんだろうか。  
あんな暗黒嗜好の掲示板に出入りしているくらいだから、当然とい  
えば当然かもしれない。

サエキは、無表情の似合わない顔で、無表情で言つた。

「絞殺？ バレるよ、なんか自殺に見せかける工作しなきや」

「違うよ、撲殺。このまま絞めたら手の痕残るじゃん。そんなこと

しないよ」

「ねえ、前から思つてたんだけど。カナタつてさあ、そんなダルそ  
うな顔して、実はドンでしょ」

添えていた手でそのままそれを引き寄せて、耳元に唇を寄せる。

ばれた?

咳くと、サエキは自嘲的に笑つた。

「あたしなんかいじめてもおもしろくないつしょ。感じやすくない  
し、あんま動じないし」

「別にそーゆつのには興味ないけど……それもおもしろいかもね」「  
できんの?」

「さあ」

いいながら、サエキの右膝に手を置いた。

擦りむいた方の足だ。サエキの足元が、痛みに歪む。

「あ、痛い? ごめん、忘れてた」

「てめ……いい笑顔しやがつて」

そう言われてはじめて、自分が少しだけ笑つて「ことに」眞付いた。  
大きめの石を椅子代わりに腰かけていたサエキの前に、ひざまづく  
ような体制でしゃがみこむ。

怯えた顔が見たかった。泣きそうな顔で逃げようともがく姿が。  
自殺志願者の集まる掲示板なんかに顔を出して「いるくせに、どこか  
奔放なサエキに、興味を抱いていたのだ。

死にたがってるくせに、人懐っこい。よく笑う。

どう見ても、人生に絶望している人間の態度ではなかつた。

どうせ、冷やかしなんだろうと思つて 実際に会つたサエキは、  
文字だけのやりとりとは印象が違つた。

感情表現が豊かなようで、読めない。くるくると表情を変えるのは、  
わざとなるのだろう。他人に、感情を読ませないようにしている。

なにを考えているかわからない、とは、カナタもよく言われた言葉  
だ。だが、サエキほど、その言葉がぴったりの人間は、見たことが  
なかつた。

苛々した。もうすぐ死ぬはずの人間が、もうすぐ死ぬはずの人間と  
会つて、話をして、どうしてそんなに楽しそうに笑うのか、理解で  
きなかつた。

だからだ。

いわゆる、 “ありのまま” のサエキの感情を、見たいと思ったのは。

「こ」のまま後ろの石に、頭叩きつけたらわ

「なに？」

「川原で足を滑らせて、打ち所が悪かった不運な人。で、片付くかも  
ね」

「カナタはどうすんの？」

「俺は……不慮の事故で連れを亡くした可哀想な人。助け呼びに行  
くにも、さつきの道じゃ1時間はかかるかもな」

サエキが、カナタの腕を取る。  
さつきも引いた袖口。

「……ねえ」

「なに？ 他殺は嫌？」

上目がちな視線と、弱々しく握る小さな拳に、加虐心を煽られたのも、束の間。

「……つ……て、え」

左腕の手首に走った激痛には、覚えがあった。

昨日、まだ傷が塞がりきっていなかつたせいか。シャワー中になるべく湯がかからないようにきつく包帯を巻いてみたりしたが、効果はあまりなくて、思わず、風呂場でしゃがみこんだ。それと同じ痛みだつた。

「……つ、う」

痛みと冷たさで、カナタの頭は逆に、急速に熱くなつていく。サエキが、掴んだ袖口を力任せに引いて、冷たい水の流れに、自分の手ごと突っ込んだのだ。

パークーの袖に、包帯に、ガーゼに、水が染み込んでいく。同時に、川底の砂利と流れる勢いが、深い切り傷をダイレクトに刺激する。無理矢理に引かれたせいで体勢が崩れ、カナタの左膝も水に浸かっていた。

「痛い？ 染まる？」

普段の世間話と何ら変わらない声色で、サエキが聞く。カナタは答えた。

「いてーに決まつて……、」

ぞつとした。

左腕の包帯は、サエキにはちらりとも見せなかつたはずだ。特別傷を庇つて過ごしていたわけでもない。

むしろできるだけ隠そと、普段と同じよつこ、なにも変わらないふうに振る舞つていたはずだ。

なのに、サエキは知つている。 気付いていた。

「なん……で、」

「なんとなく」

「は……？」

この間、手繫いだとき、さりげなく右手に変えたから。と、サエキは言った。

たつたそれだけだ。たつたそれだけのことで、気付かれていたなんて。

そう思つて、カナタは、すぐにそれを自分で否定した。  
違うのだ。今サエキが言つた通り、『なんとなく、勘で』。  
カナタは、無意識のうちに、乾いた笑いを溢していた。

「エスパーかよ……女の勘こわ、」

「ね、おんなじだね」

「は？」

サエキは歯を見せて笑つた。カナタの背筋の奥の方で、なにかがぞくつと音を立てる。

血管の内側に神経があるみたいだ。血が流れるのが鮮明にわかつて、そしてそれに、快感を感じているような。

気持ち悪くて、少しだけ、癪になりそう。

「痛いとか、生きるつて感じするの」

「……なんなのそのヤンキー漫画の主人公みたいな言い分」「生きるつて感じたくて、死ぬ方法探してるんだよ、あたし」「え?」

生きてる感じしないの。ただ寝て起きて食べて飲んで出して歩いて見て聞いて喋つて遊んで触つてるだけじゃ。

呟くように囁くように、サエキが言つ。

いつの間にかわざと逆、サエキの脣が、カナタの耳元にあつた。

聴覚を直接搖るような言葉。

「ほんとに生きてんのかな? あたし。全部夢なんじゃないかな?  
今のおたし。目が覚めたら海のない町で普通に会社員やつてる髪の黒いあたしがいるんじゃないかな?」

「サエキさん……? なに言つてんの、」

「夢だつたらいいのにって思うことある? あるでしょ。じやなきやこんなことしてないしこんな人格破綻者になつてないよねあたしも、カナタも」

サエキが死にたい理由。そう思つたが、すぐに、そうじゃないと気が付いた。

これは、サエキが、普通じゃない自殺方法を考える理由だ。

「ねえ」

そして、カナタに、直接会つことを持ち掛けってきた理由。

「あたし、あなたといふ？」

カナタは、左腕を持ち上げた。

袖から水が滴つて、ジーンズを履いた太股を濡らす。一緒に水から引き上げられたサエキの右手が、その袖口の中に滑り込んだ。肌に纏わりつく布地を捲りあげながら、冷たい指が腕を撫でる。

さつき感じた、あの、内臓に鳥肌が立つような感覚が、またした。濡れた腕があらわになる。

申し訳程度に巻かれた包帯。手首の内側に、赤いものが滲んでいる。

「傷、開いちゃったね」

サエキの唇が動く。

しばらく口を開いていなかつた気がした。無論氣のせいだが、そのくらい、この状況で、サエキの声が新鮮に思えたのだ。

取つて、と囁いた。

主語はないが、サエキにはわかつたらしい。少し眉をひそめた。

「取つて大丈夫？」

「いいよ。どーせ濡れて意味ないし」

それに、傷口、見たいんでしょ。

なんとなく言つたカナタの言葉は、正解だった。

傷を見て、痛みを感じて、生きていると認識したい、実感したい、

思い出したい。

サエキのそれは、自分の傷だけにじどまつた性癖ではなかつたのだ。

ゆつくりと、白い布を剥がした。カナタの細い手首に3、4周しか巻かれていなかつたそれは、すぐにはらりと落ちる。

傷口に添えられたガーゼを、殊更にゆつくりと剥がしていく。そうしないと痛いから、そうしているのではない。そうした方が痛いから、そうしているのだ。

「……っ……」

息が詰まる。つい三日前の傷、それも、こんなに深いものは初めてだ。

カナタの歪んだ眉間に、サエキがじっと見ている。

それに気付いて、サエキの目を見た。

「……変態」

「カナタには言われたくないんだけど」

そう言い返すサエキの目に、冷静さがなくて、また、あの感覺。今まで見たことのなかつた、特に、普段のサエキからは想像もつかないような姿を見るたびに、何度もぞくぞくと走っている。

人の傷を見て興奮するサエキと、人の痛がる顔を見て興奮するカナタ。

どっちが普通じゃないかと聞かれれば、確かに答えは出ない。

サエキが、ふう、と溜め息を吐いた。

それは、昂つた氣を幾らか落ち着かせるためだつた。

「深いね……」

「触んなよ」

「なんで？ 痛い？」

「血足りなくなる」

手首からはすでに細く一筋の血が滴つていて、カナタは服が汚れな  
いように、袖を肘の上まで捲り上げた。

男にしては、異常なまでに白く細い腕。

辺りには川の流れる音だけが「ごうごう」と響いていて、まるで自分たち二人以外のなにもかもを飲み込んでしまおうとしているみたいに感じた。

きっと、サエキの指が絡む左手を、すぐそばの川の水に浸けていれば、数時間後にはカナタの体からはほとんどの血液が抜けている。真っ青で、神秘的なほど美しい死に顔になっているはずだ。

そう言つたのは、カナタ本人だった。

できれば体から血が抜けていく間中、その感覚を味わつているカナタの顔を眺めていたいと、サエキは思った。

サエキは思わず、唇を寄せていた。

カナタは腕を引くが、横目で『えられた視線に、動けなくなる。

「ねえ……ね、カナタ」

「……な、に」

冷たい肌に舌を這わせたまま、舌足らずに尋ねた。

カナタが意外と、目に見えて困っている。サエキは、舌を出したまま、笑つた。

「痛い？」

そう聞くと、一瞬、カナタの眉がしかめられる。

痛そうに　　というよりは、痛々しそうに。

「生きてるって感じ、する？」

白い腕と赤い血と、真っ赤な舌。

少し赤らんだサエキの顔を見たとき、カナタは、さつきから自分を苛むこの感覚が何なのか、気付いてしまった。サエキもこの感覚を共有していると（正しくは、サエキも似たような衝動に動かされている）、気付いたからだつた。

触りたい。触つて、サエキの表情が変わる瞬間を見てみたい。

(別にそー ゆつのには興味ないけど)

そう、つこせりゃ、言つたはずだつたのに。

(それもおもしろいかもね)

気付いてしまつたのだ。

自分は、この人に、欲情している。

いつの間にか手のひらを掴んでいたサエキの指を握つて、顔を離させる。不満気な表情。

アヒルみたいに尖らせたこの脣が、つい今まで自分の傷を抉つていたのだと考へると、今すぐに泣き声で止まつてみたくなつた。

心臓がぞくりと、嫌な音をたてる。

「……カナタ？」

その手のひらを頬へ滑らせる。ヒレヒレに掠れて付く血が、やけに扇情的に見えた。

サエキの肌越しに、自分の血を舐め取る。細い肩がびくんと跳ねた。

「ちょ！？　え、かな」

「ねえ、生きてる実感欲しいんだよね」

目を丸くしたまま、サエキが頷く。

「俺、自分が痛いのってやなんだ」

「え、な」

「どーせなら、気持ちいいほうがいいでしょ？」

サエキの肩が強張っているのを、頃に触れた手で確認して、カナタは今度こそ、自分の口許が笑っているのを自覚した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3693y/>

---

人生の楽しい終わらせ方

2011年12月29日22時52分発行